

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

みんなく図書室、落下図書21万冊再配架作業

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大学図書館問題研究会 公開日: 2019-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳永, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009363

情報収集

翌日、執行部が館内を巡回し被害状況を確認した。書庫が本の海となっている状態は館長・副館長はじめ教員に大きな衝撃だったようである。直後に現場を見てもらえたおかげで、図書室復旧は大変なことであると博物館内で認識してもらえらることとなった。その翌日、書庫への立入禁止が教職員に周知された。

停電がなく、事務室の被害もそれほどではなかったため、図書係員は皆、早く復旧作業がしたかった。しかし、地震発生後1週間は余震が懸念されることもあり書庫での作業はすぐに取り掛かることができなかった。そのため、この間は情報収集に努めることとなる。インターネットが使えるのは大変ありがたかった。

大学図書館職員長期研修の同期生メーリングリストに問い合わせると、東日本大震災の復旧作業を行った人たちから実体験を伴った助言が寄せられた。

- ・復旧を焦らない。

棚に戻すよりもまず通路確保。

- ・きちんと休憩する。

作業時間を区切って水分補給はこまめに。

- ・必ず複数人で作業。作業者の所在は明らかに。
- ・アルバイトやボランティアには「説明しすぎるくらいがちょうどいい」。

図書館員の当たり前が、一般の方には当たり前ではない。

初期のチェックは大切。間違いに早く気づけば傷が浅くてすむ。

復旧経験の記録も読んだ。中でも参考にしたのは筑波大学附属図書館の復旧活動記録¹⁾、前年9月に受けた研修²⁾での熊本大学附属図書館の報告、国立国会図書館保存フォーラム³⁾での東北学院大学図書館の報告である。

落下図書は図書係員11名で戻すにはあまりにも多かった。復旧の陣頭指揮をとる教員

からは、図書の配架に慣れていない人でも作業できるよう場所を区分けすることが提案された。民博は請求記号1段目で地域・民族に即した分類(OWC分類)を行っている。1段目が違うものが多数混在する棚はややこしいため、そこを図書係員にと考えた。ところがそれで区分すると図書係員が担当するところが圧倒的に多くなるためこの計画を白紙に戻し、誰でも作業できるようなわかりやすいマニュアルを作成することに方向転換した。

以前在籍していた縁で、筑波大学附属図書館から、東日本大震災の時の「図書館復旧ボランティアの手引き」を送ってもらい、それを元に民博版マニュアルを作成した(図1)。復旧応援については、図書館業務を専門にしている業者が行う案が浮上していた。そのためにも「説明しすぎるくらいがちょうどいい」という意識で作成した。

平成 30 年 6 月 29 日
平成 30 年 7 月 13 日改訂

落下図書復旧作業の手引き

- 散乱図書の整理**
左右の書架から落下した図書が混在して床に落ちていますので、まずは足場を確保するために、邪魔にならない場所に重ねていきます。
図書の背表紙(薄い図書の場合は前後どちらかの表紙)に貼られている3段または4段組みのラベル1段目に書かれている「アルファベット」「数字」が同じものをだいたいでまとめるのと後の作業が楽です。
- ブックエンド等による止め**
通路に足を踏み入れられるようになったら、図書が残っている棚の段右端をブックエンドまたはストッパーで止めます。
落下しているブックエンド・ストッパーを適宜つかってください。ブックエンドやストッパーがゆがんだり、本を支えるのに耐えられないと判断した場合は新しいブックエンドを使ってください。
ゆがんだブックエンド、厚みのある大型ブックエンドは廃棄するので、段ボール箱に入れてください。
- 資料の並べ方**
 - ・床あるいは、空き棚を使って、仮に並べます。左一右に並べます。
 - <順番>
 - ラベル1段目に書かれている「アルファベット」「数字」が同じものをまとめます。
 - ラベル1段目が同じものの中で、洋書と和書にわけます(洋書→和書の順に並べます)。
和書：日本語・中国語・ハングルで書かれている図書(ラベル3段目が主にかなかたかなまたはローマ字(全て大文字))。
洋書：上記以外(請求記号ラベル3段目が主にローマ字(1文字目だけ大文字))。
 - ラベル2段目を数字が小さい方から大きい方へ並べます(小数点以下3桁まであり)。
 - 2段目の分類記号が同じ場合は、3段目の順に並べます。
 - (?) 洋書の場合は、アルファベット順に並べます。キリル文字(ロシアやモンゴルの文字)はアルファベットの順、数字はアルファベットの後に並びます。

OWC分類	E1	E1	E1	E1	E1	E1	EA1
分類記号	305	305	305	305.01	305.1	305.12	202.510
著者記号	Ale	Era	Era	Yb3	Kel	Eps	Mus
巻冊番号		1	2				

図1 民博版「落下図書復旧の手引き」

冊数算出とシミュレーション

書架業者による安全確認が終わり、5日目に落下図書の概数を出す作業を行った。落下冊数が多い3～5層は、図書係員が2人1組

となり、数えやすい単位で図書を通路に山積みにした。3通路分の合計を列数で割り、1列あたりの冊数を出して、3～5層全体の列数をかけた。この他雑誌も加え約218,000冊と算出した。

週明け、図書係員による復旧作業がはじまった。図2は私からの質問に対して筑波大の職員が記憶を元に新たに作成してくれた作業イメージ図である。2人で1通路を両側から作業する。



図2 作業イメージ

実際に作業すると、図書は請求記号の規則を把握すればよいが、雑誌がややこしいことがわかった。タイトル順であるのだが、定冠詞の有無、機関名のない紀要等が難しい。そこで雑誌担当の職員が行うこととした。

2日間の作業ペースを基に復旧完了見込を8月下旬と算出。報道機関に図書室は9月初旬を目標に再開すると発表された。

復旧作業

図書係員は3層と1層に分かれて作業を始めた。図書係が属する情報課の職員も作業に加わり、5層の図書を請求記号1段目ごとにまとめて積み上げる散乱図書整理作業を担当した。これにより足場が確保され、見通しがよくなり、心理的な負担が軽減された。

装備はヘルメット、マスク、軍手、安全靴(つま先が強化されているもの)を必須とした。特に天井から落下したのか粉状のものが

書架や床に落ちており、それを吸うのを防ぐ意味でマスクは必須であった。また、ホワイトボードを事務室に設置し、作業者の所在を明示するようにした。

地震発生2週間後、業者職員による作業がスタートした。作業は図書係員と同様、2人1組で行った。業者職員と図書係員がペアになることはしなかったが、近くで作業して質問に答えられる配置にした。作業場所は約15通路ごとに区分けをし、1通路分が終わったら次の通路に移るようにした。

作業は通路の両側から行う(写真2)。請求記号1段目ごとにだいたい山を作る。2、3段目を見て並び替える作業は、床上で行うことにしていたが、その体勢が辛いために書架に並べて行う人もいた。その場合、背表紙を手前ではなく上にする事で、次の人に引き継ぐ場合に作業途中であることをわかるようにした。



写真2 書架の両端から作業

作業の時間割は当初、40～50分作業、10分休憩で組んだが、休憩が短いと書庫内でとることになる。そこで休憩時間を15分とし(表1)、閲覧室等のイスに座って休憩することとした。配架作業に没頭してしまう人もいるが、

休憩時間ごとに書庫から出るよう図書係員が業者職員に声をかけた。作業時は夢中でも後になって疲れが出てきてしまうのである。

表1 作業の時間割

9:00～10:00	9:00～9:55
10分休憩	15分休憩
10:10～11:00	10:10～10:55
10分休憩	15分休憩
11:10～12:00	11:10～12:00
昼休み	昼休み
13:00～13:50	13:00～13:45
10分休憩	15分休憩
14:00～14:50	14:00～14:45
30分休憩	35分休憩
15:20～16:10	15:20～16:05
10分休憩	15分休憩
16:20～17:00	16:20～16:45

一日の作業終了時に、各組がそれぞれの書架図にどこを何列終了したか記入したものを回収した。その後 Excel ファイルに終了列数を転記し、進捗率を出して、復旧作業関係者のメーリングリストで報告した。進捗状況は定期的に復旧担当教員から館の危機管理委員会に報告された。

また、図書係員が共有できるように、書架図に蛍光ペンで転記して事務室内のホワイトボードに貼り付けた(図3)。白地図がどんどん塗りつぶされていき、もうすぐこの層が終わると思うと励みになる。

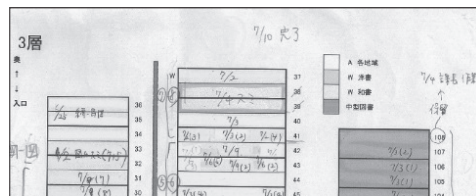


図3 書架図に進捗状況を記入

作業は順調に進み、作業終了箇所は出納方式ながら順次利用できるようにした(表2)。

3層終了時、1冊も本が落ちていない床を見た時の感動は忘れがたい。

表2 作業終了・利用開始の状況

作業終了	場所	冊数	利用開始 (館内者向)
7月9日	1層	8,500	7月14日 (出納方式)
7月10日	3層	70,000	
7月13日	2層	2,000	
7月23日	4層	70,000	7月24日 (出納方式)
8月1日	5層	65,000	8月6日 (入庫利用可)

また、民博が属する人間文化研究機構から応援の申出があり、国際日本文化研究センター(日文研)と総合地球環境学研究所(地球研)の図書室職員が作業を手伝ってくれた。日文研が4日間各2名。地球研が6日間各1名(予定よりも早く作業完了したため短縮)。猛暑の中来てもらうのが心苦しかったが、同業職員の支援は想像以上の精神的助けとなった。

予定よりも大幅に早く、8月1日に作業完了。8月6日には館内者の通常利用を可能とした。不便をかけたのにも関わらず利用者からはねぎらいの言葉をいただいた。そして8月23日の博物館部分再開時に、館外者の利用も再開した。

破損図書

破損図書は作業階ごとに設置したブックトラックに発見者が載せた。毎日最後に事務室に引き上げ、①破損軽微、②館内修理可能、③館内修理困難の3種類に仕分け、①は書架に戻した。破損図書の基準は個人差があるとは思っていたが、業者作業初日にあまりにも①が多かったため、翌日、軽微な破損(表紙折れ等)については今回の対象としないことを周知した。②については修理を体系的に学んだ職員の指導の下、数名で行った。背表紙

の破損、ページの破れが主であった。③については早い時期に教員が国立国会図書館資料保存課に助言を打診した。国会図書館からは研修への参加などいくつかの支援内容を提示いただいた。代替物の入手が困難で長期にわたる保存が必要な資料（郷土資料等）については直接修復に対応いただけるとのことだった。そこで、まず製本業者に修理を依頼し、修理困難であれば代替物入手について調査することとした。

減災のために

地震の6年前、民博では書架の上2段に図書落下防止用テープを貼った。今回、場所によっては効果があった（写真2参照）。このことは地震翌日の巡回時、教員の印象に深く残ったようで、研究室の本棚にテープを貼りたいので規格を教えてほしいという問合せが来た。現在、図書室も残りの書架にテープを貼ることを検討中である。

また、その後行われた地震想定防災訓練では、書架間の通路が使えない想定で避難誘導を行った。書庫内への図書室独自の放送も初めて行った。経験したからこそ意識するようになったことだった。

おわりに

この地震は余震がほとんどなく、また民博ではライフラインへの被害もほぼなかったため東日本大震災・熊本地震での被災機関の復旧と比較すると恵まれていたのは間違いない。更に、展示場・収蔵庫と同じように、執行部や復旧担当教員が図書室の復旧に気を配ってくれたことも有り難かった。そして被災体験機関の記録・助言を多く得ることができた。深く感謝し、そして当室の経験もいつか参考になればと思い、報告させていただく。

文献

1) 渡邊朋子、船山桂子、大和田康代「東北地

方太平洋沖地震における筑波大学附属図書館の被害と復旧活動」『大学図書館研究』94 (2012.3) pp. 18-27. DOI: 10.20722/jcul.57

- 2) 国立大学図書館協会近畿地区「その時図書館はどう動くか？ 大規模災害時における対応及び事前準備について～（平成29年度国立大学図書館協会近畿地区助成事業）」（於：和歌山大学 2017.9.1）
- 3) 国立国会図書館 第23回保存フォーラム「地震に対する図書館の備え一良かったこと、分かったこと一」（於：国立国会図書館 2012.12.20）<http://www.ndl.go.jp/jp/preservation/cooperation/forum23.html>

（とくなが・ともこ／

国立民族学博物館 情報課 図書係）

Rights were not granted to include this sentence in electronic media. Please refer to the printed journal.